活用型学習活動の工夫

山岸　律子
英語科　　斉藤亜希子
端崎　圭一

1．テーマ設定の理由

本年，平成24年度より本格実施となった新しい学習指導要領の外国語科の目標は「外国語を通じて，言語や文化に対する理解を深め，積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成を図り，聞くこと，話すこと，読むこと，書くことなどのコミュニケーション能力の基礎を養う」である。

本校英語科では，コミュニケーションの基礎となる，意欲，語彙，意味内容を伝える手段や方法といった基本的な力を積み重ね，その習得したことを表出しようとするときに思考力が働くと考えた。

総論にあるように，思考力とは設定された学習課題に対して，分類する，比較する，関連づけるなど，さまざまな方法で考える力であると考える。英語科では，生徒が学習課題に対し自己表現に取り組むときに思考力が見えるとした。たとえば，自己紹介のときに自分の好きなものや家族のことなど自分というものを構成しているものを「分類する」。それらを文に表すときに，どうすれば，相手に伝わるか「順序立てる」。また，相手に自分の意見を言うときには論理的な説明が必要となってくる。その際には「比較する」「関連づける」「理由づける」「判断する」といった思考が働く。このように，生徒の表現する姿，表現したものを通して思考力が見えると考えた。

では，思考力を働かせることができる表現活動とはどのようなものだろうか。これまでの多くの授業では最初に文法を教え，それに慣れさせるための口頭練習やパターン練習を行い，その後でその文法形式を使ったゲームや，自由度の高い活用型の活動を行ってきた。生徒たちは活動を楽しく行い，その時間の最後には，正確に書くこともできる。しかし，本当にそれで定着しているといえるのだろうか。本当の定着とは，決められた文法形式の中で行う活動では見ることができないのではないだろうか。ある場面や状況になったときに生徒自身が，そこで判断し，目的を達成するためにどうすればよいかについて考える。そのときに既習のことを使うことができれば，はじめて「定着している」といえるのではないか。「思考」の姿は，そのような，実際に即した状況の中で表現するときに見られると考える。

ところで，授業の中で，実際に即した場面を作るにはどうしたらよいか。そのために，文法形式のまとめとして行ってきた習得型の活動にとどまらず，生徒がこれまで学んできたことを頭の中で結び付け，引き出すことのできる活用型の活動に取り組むのが良いと考えた。

たとえば「自分の発明したロボットをより多くの人に理解してもらう」という課題を設定する。生徒はそのときにどんな文の形式が必要か，人に理解してもらうためにはどんな話し方が必要かを，自分で考え，頭の引き出しにしまわれている既習のことを引っ張り出してくる必要がある。そこには「決まった文法形式を誤りなく使う」ことが目的ではなく，「自分のロボットがいかに素晴らしいかを理解してもらう」という，現実的な目的がある。表現はAまたはBといった閉鎖的なものではなく，生徒たちの思考から生まれる，より開放的で拡散的なものとなることが期待される。

2．思考力の評価

評価に関しては，生徒が思考したものを，相手にわかりやすい表現につなげていくための途中の段階の評価が大切であると考えた。そのため形成的評価が中心となる。教師が指標を示し，生徒に意識させるだけではなく，活動する中で，文法的な形式や表現の方法に目を向け，生徒自身が評価の基準

を挙げていくというように行うなど，段階的に行ってきた。評価を行うことが活動の目的ではなく，活動を通して生徒の思考力，表現力を育成するための評価になっていることが大切であると考えているためである。

実際の評価の場面では，自己評価，ペアやグループの中で行う相互評価，教師による評価を通して少しずつ自分の姿を客観的に見る目を養うように取り組ませた。自分で自分の姿を思い出して客観的に評価することは難しいと考え，自己評価の際にはコンピュータルームの録音機能や，デジタルカメラの録画機能を使ったりして，読み方や話し方の評価を行わせた。その結果，記録されたものをお互いに聞いたり見たりして相互評価を行ったり，教師からの評価を行うことで，生徒自身が，自分を客観的に見る目を持つことができたように思う。そして，自分がどこまでできるようになったかを知り，次の学習につなげようとする積極的な態度を育成することに効果的であった。

評価の規準についてであるが，これまで本校英語科では，課題に対する達成度を，ルーブリックを使って評価する取り組みを行ってきたが，話すことや文法的や正確さなどあまりに詳細な評価項目があると，現実的に評価が難しくなるという難点が挙げられた。そこで，３年生では，数的な指標は計測可能な項目に限り，文法的な知識や文脈の確かさをもとに，聞き手の立場に立って表現する力を測るパフォーマンス評価を行った。詳しくは３学年の実践において述べている。

３．各学年の実践

（１）１学年の取り組み

１年生は，実践的なコミュニケーションの基礎となる言語材料や表現をより多くインプットするための習得型活動が多くなる。限られた言語材料を使って，どのような方法で実際の場面に近い活用型活動を取り入れていくかが課題となる。

①活用型活動の基礎となる習得型活動

生徒が使用したらよいと思われる語句や表現を，毎回の授業のウォームアップとして取り入れ，その中で，表現する場面を取り入れた習得型学習に取り組ませてきた。

ペアによる練習で，一人が日本語を言い，パートナーはそれを聞いて英語を言う。１分間で交代し，言えた数を記録する。１日１回行う。慣れてきたら，英語を言う方は何も見ないで言う。これまで「私は○○の言い方」「得意なものの言い方」「動作を表す言い方」「人や物の様子を表す言い方」などを練習した。教科書に出てくる表現だけでなく，生徒が実際に使いたいと思われるような身近な表現もリストに入れた。また，最初は語句のみ，次は be 動詞や I like や I'm good at の後に続けて言うなど，コロケーションで言えるように言い方にも変化をつけていった。

さらに，練習してきた表現の中から，生徒が自分で使いたいと思うものを選んでワークシートを作り，同じよ

Quick Exercise *No.1*

「私は○○」の言い方

	日本語	English
1	中学生	a junior high school student
2	アイスクリーム大好きな人	an ice cream lover
3	ウィンドウズ使う人	a Windows user
4	ピアノ弾く人	a pianist
5	料理が上手な人	a good cook
6	SMAPのファン	a big fan of SMAP
7	生徒	a student
8	アニメファン	an anime fan
9	バドミントンする人	a badminton player
10	性別	a girl
11		
12		
13		
14		
15		

日付	日語	できた！
5/10	12	14
5/11	12	15
5/15	12	13

図１：生徒が表現を選んで作ったワークシート

うに練習した。毎日練習する，何週間か後に再び練習する，自分の表現に使いたいものを選んで練習するという手順を踏むことによって，抵抗感なく，色々な表現に慣れていけるように思われた。

②活用型の学習

ア　自己紹介スピーチ

教科書の本文にある自己紹介の文を音読練習した後で，自分自身の自己紹介を行った。習得型の活動で練習した表現を使い，自分の得意なこと，好きなことをなど幅広く話している様子がうかがえた。

イ　自分の身近な人を紹介しよう

家族，友達など自分がよく知っている人について説明するスピーチの活動である。

手順

・ウェブマッピングで，中心の円の中に自分が紹介したい人の名前を書く。その周りに，その人の特徴や好きなこと，自分がその人についてどう思っているかなど，日本語で書いていく。その図をもとに文を書く。さらに文の順番や言い方を変えたりして推敲する。その段階で教師が指導する。

・読む練習を行い，暗唱する。

・デジタルカメラの録画機能を使い，グループやペアで録画し合い，自分の話し方を見る。教師は声の大きさや，アクセントについて指導した。

・写真を見せながら，クラスの友達に紹介する。一対一で紹介する。一人の生徒は大体 15～17 回紹介した。

・一人ずつカメラの前で撮影を行い，総括的評価を行った。

・上手に話している生徒の画像をタブレット型端末に保存し，廊下に展示して見られるようにした。

自己紹介スピーチのときは，自分が覚えた表現をそのまま自分に当てはめて文にするだけであったが，この活動では，ウェブマッピングを使って自分の頭の中を整理し，文に置き換えていった。そのため，相手に理解してもらいやすい文の構成に気づくことができたようである。また，録画された自分の話し方をチェックしたり，10 人以上の友達に一対一で話をしたりするという活動を通して，相手に伝わりやすい声の大きさ，アクセント，間の取り方など，コミュニケーション活動の上で大切な姿勢を自然に身につけていくことができたと思う。さらに，上手な生徒の画像を見られるようにすることで，クラスの壁を越えて上手な生徒の様子を見ることができ，生徒たちにはいい刺激となったようである。

写真１：写真を見せながら，身近な人を紹介する様子

ウ　自分の好きな有名人を紹介しよう

“Why”に対する答えとして“Because”を使って説明する活動である。短い文を使って練習した後，自分が本当に好きな有名人を思い浮かべ，その好きな理由を他の人に説明する。

手順

・ウェブマッピングで，中心の円の中に好きな有名人の名前を書く。その周りには，なぜその人が好きなのか，どんな特徴があるか，知っていることを円で囲んで書いていく。

・その周りの円を「歌に関すること」「容姿に関すること」というようにグループごとに色を分けて塗っていく。

・グループに，言いたいことの順に番号を付けていく。

・番号にしたがって，文を書いていく。

・声に出して話す練習をする。

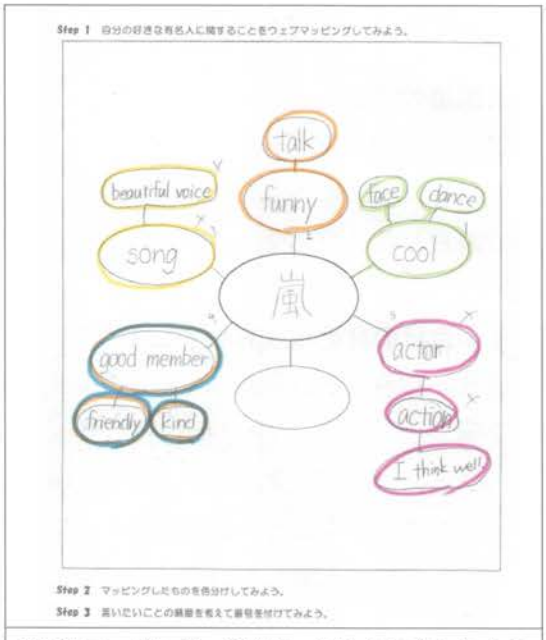


図２：マッピング，色分け，順位付けをしたもの

・教室内を歩きまわり，二人または三人でお互いの好きな有名人について紹介し合う。

人と話すときには，紙を見ない。生徒は自分が言いたいグループの内容だけを覚えておき，その中の順番が変わっても良いし，グループ自体の順番が変わっても良いとする。

自分の身近な人を紹介する活動のときは，出来上がった文を暗記して話すという活動であったが，この活動では，暗記をするのではなく，分類し，整理し，順序立てて話すという手順だけを指導した。生徒は，ウェブマッピング，色分けによるグループ化，ランク付けをすることで，多少順番が変わっても言いたいことを言えればいい，と気楽に無理なく話を続けていた。また，自分が好きな有名人について人に紹介したいという気持ちがあるため，非常に意欲的に取り組んでいた。

昨年度の本校研究発表会の際に，「アイコンタクトで相手を見ることにこだわりすぎではないか，実際はそんなにじっと見つめながら話はしない」という指摘を受けた。今回の活動を通して生徒たちの様子を見るとたしかに，自然と相手の顔を見てジェスチャーを交えながら話をしていた。相手に伝えたいという場と状況を与えることの大切さを実感した。

③成果と今後の課題

１年生に活用型の活動は難しいのではないかと考えていたが，日常の授業の中に習得型の活動を入れながら，それぞれの段階において自分のことを表現したり考えを少しでも言ったりするような活用型の学習が表現活動には非常に大切だと感じた。また生徒が思考を整理する上でウェブマッピングやイメージしたものを絵にするなど，思考を支えるツールを使うことが有効であった。実際に生徒がどのように思考したかを評価できるのは，出来上がった表現の文やスピーチの様子ではなく，途中の段階のウェブマッピングの図や生徒が走り書きしたメモなどである。その段階で分類したり関連づけたり比較したりといった手法を指導することで，言いたいことが整理され筋道の通った思考へと高めることができる。

今後は，４技能にウェブマッピングやイメージ化などスモールステップを組み合わせたり達成目的に合わせて手順を変えたりすることで，生徒の思考力を育成するために効果的な方法を見つけていき

たい。また，活用型学習で考えられる生徒の姿，最終的な目標，そのための日常の活動と，見通しを持って指導計画を立てていく必要がある。

（２）２年生の実践

①実践の概要

今年度の２年生の最終ゴールは「賛成反対の意見を言うことができる」とした。そのゴールを達成するには，生徒が論理的に表現する必要があると考えた。賛成反対などの意見を言う議論，討論，その他英作文などの英語での表現は簡潔で論理的であることが求められる。ここで言う，論理的な表現とは，それらの英語表現の中で最も伝えたいことを最初に表し，それを裏付ける内容を述べていくという形だと考えた。例えば，トピックセンテンスが英作文の各段落の冒頭に来るようなことである。

そこで２年生では，論理的に表現できるようにするために，プロジェクトで，段階を追って繰り返し指導していくこととした。ここでのプロジェクトとは，いくつかの単元を終えた後に既習事項を使って何時間かかけて取り組む表現活動のことである。その段階とは，㋐いろいろな考えを出す段階，㋑それを整理する段階，㋒入らない情報を省く段階，㋓順序だてる段階，㋔裏付けを考える段階，㋕その裏付けが本当に正しいかを判断する段階，㋖裏付けが正しくないことを証明する段階などである。

そのプロジェクトは主に下記の３つである。特に力を入れた段階を横に記した。

１．将来の夢（１０月）　・・・㋐㋑㋒
２．お勧めの場所を紹介しよう（１月）　・・・㋒㋓㋔
３．賛成反対の意見を言おう（２月）　・・・㋔㋕㋖

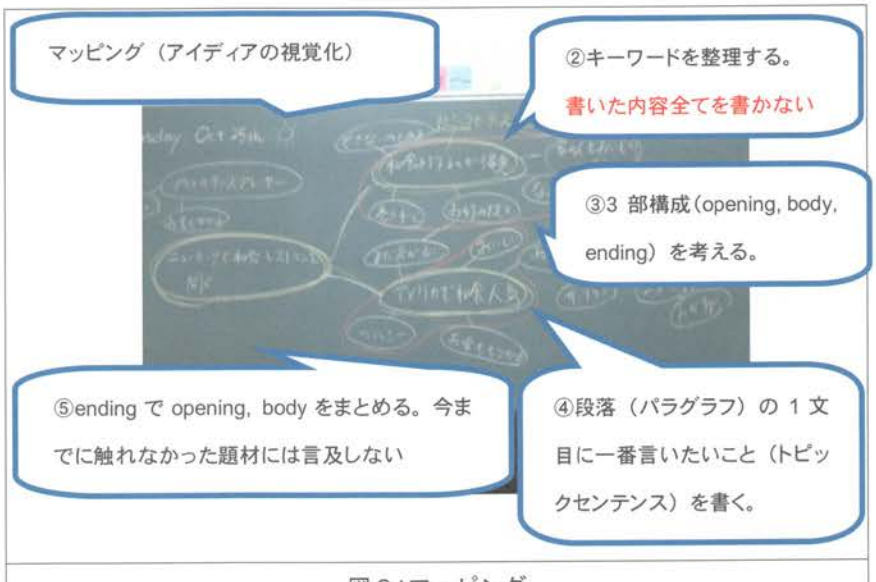


図３：マッピング

１つ目は，生徒は自分の「将来の夢」について発表した。その準備として英作文を書かせたのだが，これまでの生徒の英作文は内容が多くても一貫性がなく，内容を絞って深い内容について表現できていないものが多かった。そこで，英作文を書く際は opening，body，ending の３つのパートからなること，自分の言いたいことは段落の最初で述べることを指導した。その際にブレーンストーミングとしてマッピングをした。マッピングをした後は，自分の考えを比較し整理し，分類をした。分類をした後は，いくつかの内容について深く表現するために，英作文に使う内容と使わない内容の取捨選択をした。このプロジェクトはスピーチが最終目標だったので，クラスでのスピーチ発表を行い，更にＡＬＴの前でスピーチ発表をし，いくつかの質問を受けた。

２つ目の「お勧めの場所を紹介しよう」では，お勧めの場所を紹介した英作文３つを用意し，生徒に読み比べをさせその中から良い英作文，良くない英作文を考えさせた。それによって各段落の最初にトピックセンテンスがあり，内容にブレがなく首尾一貫してトピックセンテンスを支える英作文は読みやすく，読み手に書き手の伝えたいことがより強く伝わってくることに気づかせた。このプロジ

ェクトでは最後に生徒自身の英文をお互いに読んで添削し，一番行きたいと思った作品を選び，クラスで選ばれた４作品を共有した。ここでは，生徒達の感想として「３つのパートに分かれて書かれている作品は読みやすい」という感想があった。

３つ目の「賛成反対意見を言おう」では，自分の意見とは違っていてもいろいろな立場の意見を理解し，論理的に自分自身の意見を表現できることをゴールとした。テーマは“Kanazawa is a good place to live.”で，賛成と反対に別れてどちらがより説得力があるかをディベート形式で賛成反対意見を主張する形で指導した。

〔指導の手順〕

１．練習①（２名対２名のチーム対抗）

・男子２名対女子２名のチーム対抗でじゃんけんをし，テーマについて賛成と反対のどちらを担当するかを決める。

・トゥールミンモデル（根拠，理由，主張）を使うと論理的に自分の意見を述べることができることを確認する。（全体で）

・根拠は事実やデータなどであることを確認する。（全体で）

・個人で理由と根拠を考える。

・チームごとにどの理由と根拠を使うかを相談する。

・実際に対戦する。
賛成側立論①，反対側立論①，賛成側立論②，反対側立論②，反対側反論①，賛成側反論①の順番（図５）で行う。

・どういった表現を使ったかを黒板に書いて共有する。（全体で）

・理由，根拠をメモし，ポイントでジャッジをすることを指導する。（全体で）

２．練習②（同性同士の１名対１名の個人対抗）

・じゃんけんをし，テーマについて賛成と反対のどちらを担当するかを決める。

・個人で理由と根拠を考える。

・実際に対戦する。
賛成側立論①，反対側立論①，反対側反論①，賛成側反論①の順番（図６）で行う。

・根拠としてどんなことを言っていたかを共有する。（全体で）

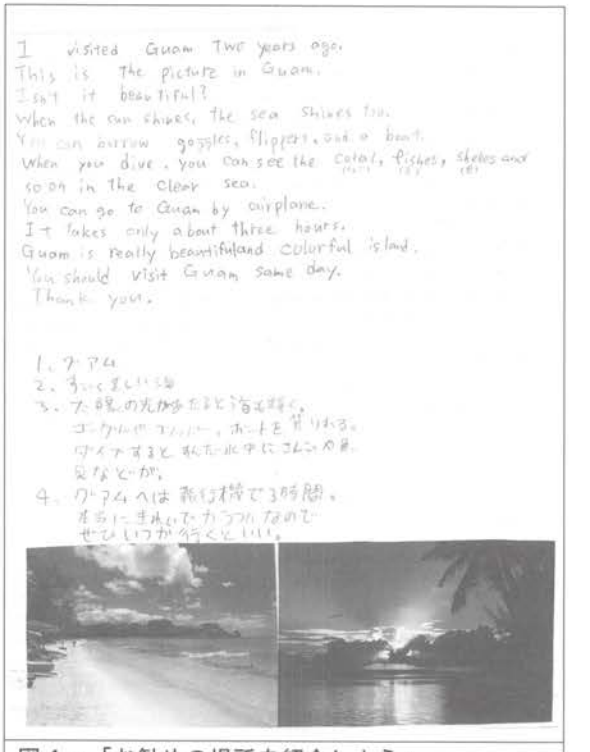


図４：「お勧めの場所を紹介しよう」生徒による英作文

	チームA	チームB
２分	賛成側立論① →	
２分		← 反対側立論①
２分	賛成側立論② →	
２分	←	反対側立論②
２分	作戦タイム	
２分		← 反対側反論①
２分	賛成側反論① →	

図５：２名対２名のディベート形式で意見を主張する際の発言の順番

	チームA	チームB
２分	賛成側立論① →	
２分	←	反対側立論①
２分	作戦タイム	
２分		← 反対側反論①
２分	賛成側反論① →	

図６：１名対１名のディベート形式で意見を主張する際の発言の順番

・根拠が事実などのしっかりしている内容がより論理的であることを確認。（全体で）
・反論は根拠を別の見方をすることで有利な理由を示すことができると指導する。（全体で）

3．本番（異性同士の１名対１名の個人対抗）
・じゃんけんをし，テーマについて賛成と反対のどちらを担当するかを決める。
・個人で理由と根拠を考える。
・実際に対戦する。
賛成側立論①，反対側立論①，反対側反論①，賛成側反論①の順番で行う。
・ジャッジはポイントが同じでも根拠の内容を見極めて必ず勝敗を決めることを確認する。（全体で）

4．男子３名対女子３名のチーム対抗（モデル）
・男子３名対女子３名のチーム対抗でじゃんけんをし，テーマについて賛成と反対のどちらを担当するかを決める。
・個人で理由と根拠を考える。
・チームごとにどの理由と根拠を使うかを相談する。
・実際に対戦する。
賛成側立論①，反対側立論①，賛成側立論②，反対側立論②，反対側反論①，賛成側反論①，反対側反論②，賛成側反論②の順番（図７）で行う。

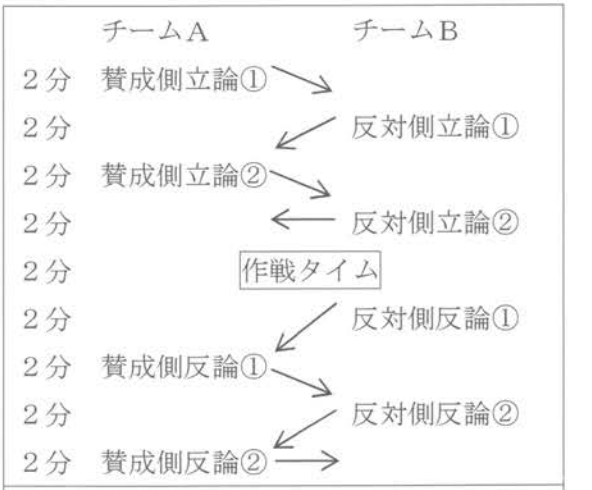


図７：３名対３名のディベート形式で意見を主張する際の発言の順番

・最後にジャッジ一人一人が自分のジャッジ結果を賛成と反対の色別のカードを挙げて示す。（全体で）
・どうしてそのジャッジをしたかを共有する。（全体で）
・教師のジャッジとその理由を言う。根拠の数，反論の数，根拠の内容などについて触れる。（全体で）

生徒は段階を踏むことで，使える表現に触れ一対一でもある程度自分の主張の理由を表現できるようになっていたと感じる。しかしながら，反論することには苦労していた。この活動の途中で，英語で表現できないことから学習に集中できていない様子が見られたが，自分が英語でできないもどかしさや他の生徒ができているという焦燥感を感じてほしいという思いから，教師主導の授業ではなく生徒主導の授業を続けた。このプロジェクトの最後のディベートの代表になった生徒はやりがいを感じ，他の生徒は良いモデルに触れることができ良い刺激になったように思う。２回目の反論を言う場面では準備した内容ではなく，その場で考えたものだったので，勝つためにどんな論理的な内容を言おうか深く思考していた。また，ディベートを聞いていたジャッジの生徒達にとってもとても興味深い場面となった。特に，反論を聞いて理由を支える根拠として事実が大切だと感じたようだった。これは，社会科で既習であるトゥールミンモデルの影響があるように思った。

②思考力の指導について

英語科では，既習事項を実際に使用し表現する際に，思考が働くと考える。どのような表現をする

時にどのような思考が働いているかを見て来たが，いきなり表現するということはかなり難しかった。そこで，友人の英文を読んだり，表現をクラスで共有したりすることでいろいろな表現に触れる回数を増やした。また別の表現を教師が与えることでモデルに触れる回数も増やした。これらが，どういった表現をすべきかを思考し判断する手助けになると考えたからである。

また，日本語にはない，英語での表現の時に必要な，簡潔で論理的な表現についても英作文とディベートを通して指導した。

③思考力の評価について

英語科の評価の４観点には「思考」がない。４観点を見た場合，特に「表現」をするまで「思考・判断」が伴うのではと考え，これを評価することで「思考」しているかを見ることにした。「表現」する時は「書く」，「話す」場合があるのでこの２つの時に思考が働いているか評価した。

書く技能に焦点をあてた場合は，思考の過程で描いたマッピングが正しく整理分類され，英作文が opening, body, ending の３つのパートからできているかを評価した。また，各パートにトピックセンテンスがあり，それを支える英文を書いているかも評価した。これは一人一人の生徒に対して評価するのは現実的に難しいので，生徒が相互評価し良い英作文を選ぶ形で行った。

また，話す技能に焦点をあてた場合は，ディベートの際のジャッジをする時に，ワークシートに理由とその理由を支える根拠も記入することで，その理由づけがいかに論理的かを点数化して判断できるようにした。

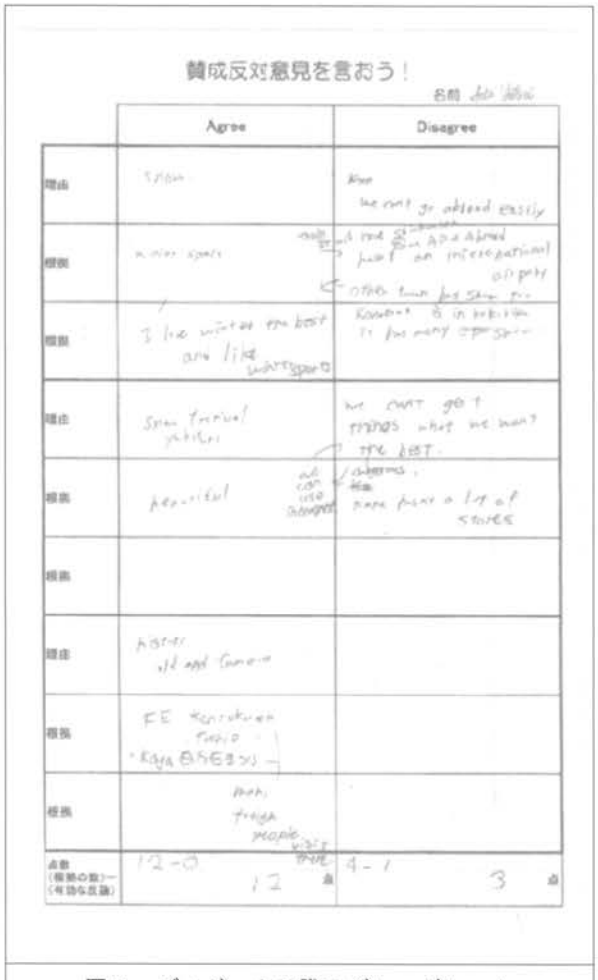


図８：ディベートの際のジャッジシート

④２年生の実践を通しての課題

成果と課題

説得力のある表現のためには理由とそれを支える根拠（事実）が大切であると生徒自身が体験を通して気づくことができたのは大きな成果だと考える。これは他教科（社会科）で指導されていたので，生徒達にすんなりと理解されていったように思う。

これまで教える時間が多く，生徒自身が発表するまでの練習の時間をほとんどとることがなかったが，生徒の活動の時間を多くした。この方が生徒が自信を持って発表できていたように思う。

また，教えるのではなく生徒自身に気づかせ，生徒同士の作品や生徒同士の会話から教え合い学ぶ活動は生徒達にとって意欲的になることができる学習活動だと感じた。

課題として，見える指導を意識したが，なかなか難しく，もう少し工夫していきたいと感じた。

最後のプロジェクトでは英文の正確さを指導することはほとんどなかったので，正確性の指導のあり方を研究していきたい。

（３）３学年の実践

①実践の概要

英語科においては，コミュニケーションの基盤となる言語材料を身につけ，習得した言語材料を用いて自分の考えを表出しようとするときに「思考力」が働くと考えた。また，特定の文法項目の使用を目的とする活動を通してではなく，生徒自身がそこで判断し，目的を達成するためにはどうすればよいかを考える場面や状況がある活動を設定することが，「オーセンティックな（＝本物の）」思考力を育むことができるのではないかとも考えた。そこで，そうした活動の一つとして，英語学習の定番 Show &Tell 活動をベースに，「品物を売り込もう！（Flea Market にチャレンジ）」という活動を実施することとした。自分の宝物をフリーマーケットに出品し，客とやり取りしながらその品物を売り込むという状況を想定し，その中で，知識として獲得した言語材料を活用させることとした。

品物を売り込もう！（Flea Market にチャレンジ）

【店主になる皆さんへ】

あなたが大切にしてきたお気に入りの品物。まだまだ使えるのですが，どうしても新しい品物を手に入れなければならない事情が生じました。新しい品物を買うために，そのお気に入りの品物を売って資金の一部としようと考えました。そこで，今度の休日，Flea Market に出店してその品物を売ることにしました。

①お客さんが来たら，挨拶をしよう。
②お客さんに，自分の品物の長所や使用状況をアピールしてみよう。
③お客さんからの質問に応答しよう。
④価格の交渉をしよう。

【お客さんになる皆さんへ】

退屈な休日。気晴らしにふらっと散歩に出かけました。しばらく歩くと，何やら人がたくさん集まっています。そこは，Flea Market でした。暇つぶしに，次々にお店に立ち寄って冷やかしてみることにしました。

①店主が話しかけてきたら，挨拶をしよう。
②店主の話に耳を傾け，品物の長所や使用状況を聞き出そう。
③店主に，品物についての質問をしよう。
④価格の交渉をしよう。
⑤今は買う気がないので、あとで来ると言って店から離れましょう。

「品物を売り込もう！」の前に

店主: Hi.
客: Oh, hi.
店主: Can I help you?
客: I'm looking for something interesting.
店主: Oh, I have something good here. Take a look at this.
客: What is it?
店主: It is ☆. Are you interested in ☆?

Small Talk の要領で，店主は，自分の品物のアピールをする。客はその品物についての質問をする。(約1分間)

客: How much is it?
店主: It's ☆ yen.
客: I think it's expensive. Could you give me a discount?
店主: How about ☆ yen?
客: That sounds better. But I'd like to go to another shop. I may be back again.
店主: Thank you. I hope you'll be back soon.

図９：授業中に黒板に貼った模造紙
「品物を売り込もう」の活動の説明と売り手と買い手の基本的な会話パターンが示してある。

〔指導計画〕

第一次：「品物を売り込もう（Flea Market にチャレンジ）」の活動の把握と準備（３時間）

- 映像でモデルを見る。図９を用いて，活動全体の説明を聞き活動内容を理解する。その後，イメージマップを作成する（図 10）。…第１時
- 予想される買い手からの質問へ回答するため情報をイメージマップに追加する。品物を売り込む練習をする。…第２時
- どんな売り手が良い売り手であるのかを理解した上で（表１），グループで練習する。その際，グループ内で相互評価を行う。また，デジタルカメラを用いて撮影した動画で自己評価も行う。…第３時

第二次：教室をフリーマーケットに見立てての活動（１時間）

- 教室内の壁に沿うようにして，机を向かい合わせにして配置し，フォークダンスのように二人が対面する（写真２，３）。外側の生徒が売り手となり固定して動かない。内側の生徒が買い手となり，会話が終わるたびに移動していく。

第三次：ＡＬＴによるパフォーマンス評価（２時間）

②思考力の指導について（その１）

帯学習として Small Talk を２年生の後半から導入しているが，その際に，Small Talk のトピックについて，自分が話す内容をマッピングさせることで，知識としての語彙やフレーズを書き出し，そのつながり（関連性）を可視化させてみた。こうした知識や情報を関連づけることが，思考力アップの第一ステップである考える。今回の活動に用いる自分の宝物についても，英語でどんなことが言えるの

かをマッピングさせ，その品物に関しての自分の考えを表出させた。また，買い手がどんな質問をするのかを事前に予想させ，それに回答するときに必要な情報もマッピングさせることで，思考の幅を広げさせることも試みた。

図 10：生徒のマッピング例
黒字が最初のマッピング。赤字が質問予想後に付け足した情報

③思考力の評価について

指導要録の観点別学習状況の評価において，「思考」という観点が英語にはない。よって，思考そのものを評価対象にするすることはない。代わりに，先に述べたように自分の考えを表出できる，すなわち，「思考・判断を適切に表現する」ことができているかをみることでその評価としたいと考える。評価は，まず，生徒同士のやり取りを録画させたあと，ルーブリック（評価指標）※1を使って，相互評価と自己評価（＝形成的評価）に取り組ませた。その後，ＡＬＴとのやり取りを通してパフォーマンス評価※2（＝総括的評価）を行った。

将来は社長級	自らアピールする形，または，買い手からの質問に応える形で，商品に関して６つ以上の異なる情報や思いを正しく伝えることができる。その際，既に習った不定詞や動名詞，完了形，比較の表現，受け身，分詞や関係代名詞で説明を加えるなどの表現が豊富に見られる。
部長級	５つ以上の異なる情報や思いを伝えることができる。正しくないこともあるが，既に習った表現を積極的に使っている。
課長級	４つ以上の異なる情報や思いを伝えることができる。正しくないこともあるが，既に習った表現を積極的に使っている。
係長級	３つ以上の異なる情報や思いを伝えているが，単純な文に終始している。
見習い社員級	１～２つだけの情報を伝えている。または，ほとんど伝えることができない。

表　授業で使用したルーブリック

※1　パフォーマンス評価の方法を用いた場合，成功の度合いを示す数レベル程度の尺度と，それぞれのレベルに対応するパフォーマンスの特徴を示した記述語からなる評価基準表のこと。英語科では，これを用いた評価活動は数年前から取り組んでいるが，「話すこと」を測る場合，盛り込む項目を絞った方がよいことがわかってきている。

※2　伝統的な客観テストで評価される学力の様相には限界があることへの反省から，学力を総合的に評価するために近年登場した評価法。観察や対話，自由記述，実技を含めて，パフォーマンス（表現活動や表現物）をもとに評価する方法である。このとき子供たちに与えられる課題をパフォーマンス課題というが，それは，リアルな文脈（あるいはシミュレーションの文脈）において，知識やスキルを総合して使いこなすことを求める課題である。本活動においては，ＡＬＴに協力してもらうことで，臨場感を高めるとともに，英語そのものが正しく伝わるかという観点を厳密に測ることを試みた。

④本活動のルーブリックについて

本活動は，途中に買い手の質問に応える場面があるので，「聞くこと」の活動とも考えられる。しかし，ねらいを商品の良さをアピールしたり自分の商品に対する思いを伝えたりすることにおいているので，評価規準は，「話すこと」に関しての評価規準，すなわち，「自分の考えや気持ち，事実などを

聞き手に正しく伝えることができる」とした。この規準に対してどのようなパフォーマンスであればそれが成功していると言えるのかを示したのが，左ページの表のルーブリックである。

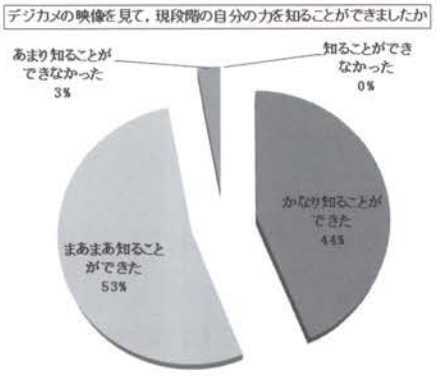
⑤デジカメの動画撮影機能を利用した自己評価（形成的評価）

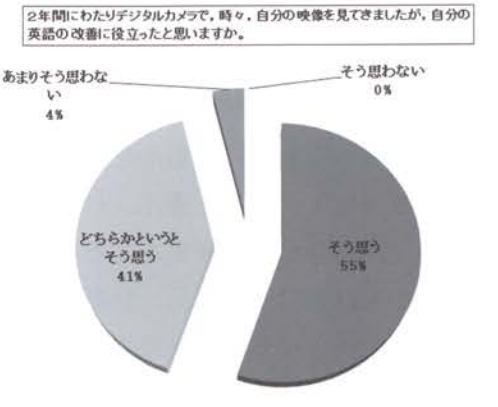
形成的評価には，三方向からの評価が欠かせないと考えている。一つ目は，自己評価。二つ目はグループなどによる相互評価。三つ目は，教師からの評価である。そのうち，自己評価であるが，生徒にそれを適切に行わせることができれば，生徒のメタ認知力を高めて生涯学習の基礎となる自立的な学習者を育てることができると考える。しかしながら，自分の姿を客観的に見ることは鏡でもない限り難しい。今までの取り組ませた自己評価は，記憶に頼った自己評価に過ぎなかった。そこで，昨年度から授業において実験的に行ったことは，デジタルカメラの動画撮影機能を使い自己評価に取り組ませることである。生徒同士が英語スピーチ活動等のパフォーマンスを互いに撮影後，その場ですぐに自分の姿を見直すことができるのである。また，撮った映像をクラス全員と教師でその場で見ながら，形成的に評価することができれば，改善点を共有することができ学びがより深まるのではないかと考える。

本研究の対象となった３年生は，２年生の時からデジカメでの自己評価を行ってきた。２年間で７回実施してくると，デジカメの操作にも慣れ非常にスムーズに自己評価が行えるようになった。そこで，本活動後に，以下の２項目についてアンケートを実施した。

・デジカメの映像を見て，現段階の自分の力を知ることができましたか。

・２年間にわたりデジタルカメラで，時々，自分の映像を見てきましたが，自分の英語の改善に役立ったと思いますか。





上のグラフを見てわかるように，どちらの項目においても生徒たちはデジカメで撮影した動画を用いての自己評価が，有益であったと思っていることが分かる。しかも，肯定的な回答がいずれも 95 パーセントを超えたことに驚いている。今後も，こうした情報機器の活用を考えてみたい。

写真２：対面してフリーマーケットを楽しむ生徒

写真３：人形を売り込む生徒

⑥思考力の指導について（その２）

本研究に関する中間意見交換会を 11 月に開催した際，参会者から，生徒の思考力を伸ばすために取り組ませてきたイメージマップを今後どのように使う予定であるかという質問をいただいた。その時に，「品物を売りこもう」では「話す」際の思考を支えるツールとしてイメージマップを使ったが，これを「書く」際にもツールとして使う予定であると応えた。そこで，教科書の最後の単元「自己ＰＲしよう」で実践してみた。

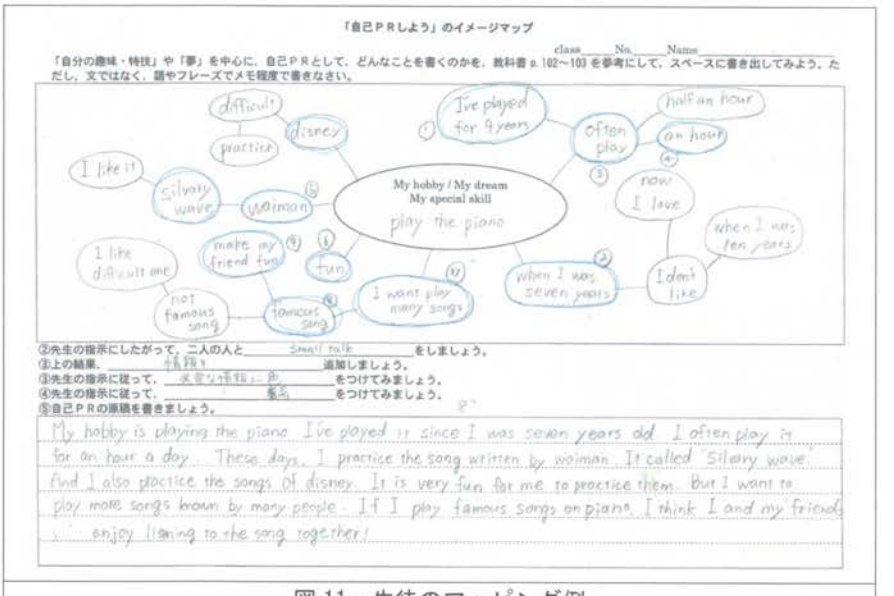


図 11：生徒のマッピング例
青色で囲まれたところが選んだ情報。番号が，作文を書く順序。

学習活動は以下の ａ ～ ｅ であるが，指導上，意識したことは，「話すこと」「書くことを」「聞くこと」を有機的に結び付けることであった。

ａ　Small Talk のトピックとして，自己ＰＲとなる趣味，夢，特技に関する情報のイメージマップを作る。

ｂ　イメージマップをもとに，二人と Small Talk を行う。（「話すこと」「聞くこと」の活動）

ｃ　上のｂの活動を通して不足していると気づいた情報をイメージマップに追加する。

ｄ　多くの情報の中から，まとまりのある自己ＰＲをするために必要と思われる情報を選び，マップ上に色をつける。（図 11 では，青色で情報を囲んでいる。）

ｅ　教科書のモデル文を参考にしながら，選んだ情報をどのような順序で発表すると，相手にわかりやすいまとまったものになるかを考えて番号をつける。

ｆ　番号に基づいて，作文を書く。（「書くこと」の活動）

ｇ　グループ内で自己ＰＲ発表をする。聞き手は，発表を聞いた後，発表内容に関してまとめ，不明な点について英語でたずねる。（「話すこと」「聞くこと」の活動）

Small Talk のようなおしゃべりでは，話の焦点があちらこちらに移動しても，話すことがたくさんあれば，ある程度の時間を継続して話し続けることができる。しかし，作文においては，何をどのように書くのかが問題になる。作文が苦手な生徒には，これがなかなか発想できない。この活動では，ほぼ生徒の全員が時間内にまとまりのある文が書けた。ことから，上のような手順を示して指導してあげることが作文指導では有効ではないかと考える。

⑥３年生の実践を通しての課題

今回の実践ではいくつかの課題が見えてきている。まず，イメージマップの作成をすると時間がかかること。どの時期にどれくらいの回数を組み込んでいくと効果的なのかを考えていきたい。次に，ルーブリックに盛り込む項目において，量的なものと質的なもののバランスをいかに取るかということ。観点によって当然違ってくるのであるが，信頼性と妥当性を考慮しつつ３年間の中でそのバランスを取らなければならないと考えている。最後に，この活動では，「話すこと」「聞くこと」「書くこと」を取り扱ったが，「読むこと」においていかに思考力を育むのかを考えていきたい。

４．成果と今後の課題

英語科では，今年度は主に「話す」「書く」という表現活動の中で働く思考を見取り，評価することに取り組んだ。

評価においては自己評価，相互評価を学習課題やその段階に合わせて取り入れてきた。自己評価においては，録音・録画機材の使用を行うことが有効であると考えるが，最初は機器に慣れない生徒が使い方について何度も質問したり，うまくいかずに時間がかかってしまったりすることがあった。しかし使い続けていくうちに，生徒の手順も段々と良くなり，学習課題の目的を達成できるようになることがわかってきた。

規準は，「今回の規準は，Aはこういう風に話すこと…」というような教師からのトップダウン型ではなく，生徒自身が活動の中から見いだすようなボトムアップ型で示していくことが，生徒の実状に合っているように感じた。つまり，「話すこと」の目的である相手への伝わりやすさや説得力を，どういったところに感じるか生徒自身の言葉で言わせ，そこから規準を挙げていくという方法である。規準は語句や文の数による数的なものと，文の複雑さや接続詞の使い方など，文の質的なものに分けることができるが，そのバランスやいつそれらの規準を示すかをこれから工夫する余地がある。規準を自分たちの言葉で示すようになることで，マッピングやメモの整理の際にも，自分の考えを判断したり，分類したり，比較したり，整理したりなど思考を支えるツールをスムーズに使えるようなると感じた。

今後は，生徒の「書く」「聞く」「話す」活動に「読む」活動を関連させ，四技能を統合した活用型学習の工夫に取り組んでいきたい。また思考を支えるツールとしてマッピングやイメージ化などのスモールステップを段階に応じて使うことで，より積極的に思考し，表現しようとする態度を育成したい。

さらに，今年度の取り組みに加え，理由や根拠を挙げて自分の考えを述べるなど，論理的な思考を表現につなげるための指導と評価の工夫が必要であると感じている。

また，「思考力」というとき，母語での思考力と外国語での思考力とではどのような違いがあるのか，つまり外国語での思考力といってもその途中の段階では母語によるものではないのか，といった疑問がある。本当に外国語による思考力を育むためにはどのような指導，評価が必要なのか考えていきたい。

〔参考文献〕

中嶋洋一著（1997）『英語のディベート授業30の技―生徒が熱狂・教室が騒然』英語授業改革双書
田中耕治編著(2011)『パフォーマンス評価－思考力・判断力・表現力を育む授業作り－』ぎょうせい